

病院長 就任のご挨拶

皆さまには日頃から患者さんのご紹介、移行期医療におきまして多大なるご支援、ご協力を賜り御礼申し上げます。

私はこの度、川田博昭前病院長の後任として病院長に就任した光田信明と申します。当センターが開院した後に、医師となった産婦人科医で、周産期医療を専門にしています。地域医療としては、産婦人科診療相互援助システム(OGCS) 委員長として母体搬送に関わってきました。どうぞよろしくお願いいたします。

最近よく耳にする言葉に“サステナブル”というものがあります。慣れないと舌を噛みそうですが、スペルは『sustainable』です。“持続可能”と訳されることが多いです。この単語を用いた言葉としてSDGs(持続可能な開発目標;Sustainable Development Goals)があります。これは、2015年9月の国連サミットで、採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられたものです。地球環境を守り、「誰一人取り残さない」ことを強調し、2030年までに達成することを目標としています。元々は2000年の国連ミレニアムサミットで、MDGs(Millennium Development Goals「ミレニアム開発目標」)が採択されました。SDGsはMDGsの次期バージョンともいえます。中でもMDG5は母体死亡の減少を目標とし、1990年の母体死亡を2015年までに1/4にするというものでした。

医療界の持続可能性にとって医師の確保は大きな要因です。2024年からは“医師の働き方改革”が実施されます。この改革は、“地域医療構想”、“医師確保対策”との三位一体改革とも言われています。特に、“医師の働き方改革”によって時間外労働の規制は厳しく設定されることとなります。今まで、医療機関は医師を中心に、患者さんやその家族に寄り添い、精一杯の努力を積み重ねてきました。しかしながら、一定時間を超えたら、働いたらダメですよとされてしまうのです。当然ながら、患者さんへの医療提供を継続していくという使命はそのままです。これは、すべての医師に適應されるので、すべての医療機関にとって影響が及ぶ可能性があります。このような状況が想定されていますが、当センターの医療を変わず提供し続ける、そして高度な医療についても維持できるよう万全の体制をとってゆく所存です。

当センターは開院(1981年)から40年を過ぎ、高度医療提供を維持しながら、近年、小児救急医療にも新しい分野を拡大してきました。2018年から小児救命救急センター認可、2020年から二次救急告示医療機関認定、2022年からは一次救急医療にも参画しました。こうした事業は当センターだけの頑張りではどうしようもありません。地域の中で信頼され、利活用いただいてこそ維持することが可能となります。地域医療との連携のために、直通電話、相談体制等も備えておりますので、ご利用いただければと思います。

当センターに対してのご要望・ご助言がありましたら、いつでも、何でも、患者支援センターをご利用ください。先生方皆さまのお声をいただいてこそ、よりよい体制を継続できることに繋がります。よろしくお願いいたします。



病院長 光田 信明

基本理念

母と子、そして家族が笑顔になれるよう、質の高い医療と研究を推進します。

基本方針

- 周産期・小児医療の基幹施設として高度で専門的な医療を提供します。
- 患者さんとの相互信頼の立場に立った医療を行います。
- 地域と連携して、母子保健を充実させます。
- 母子に関する疾病の原因解明や先進医療の開発研究を進めます。

副院長 就任のご挨拶

地域の医療機関の皆さまには、いつも数多くの外科症例をご紹介いただきありがとうございます。小児外科の臼井規朗と申します。この度、大阪母子医療センターの副院長を拝命いたしました。今後は小児外科医としてではなく、当センターと地域の医療機関の皆さまとの橋渡し役としてお仕事をさせていただくことになりました。

センター内では、医療安全管理を担当させていただきます。院内で発生したインシデントやアクシデントを詳細に検討してその原因を解析し、業務を改善してセンターの医療安全体制がより確実なものになるよう努めてまいります。

また、今なお新型コロナに感染される小児患者さんが発生している現状では、大阪府の施設として感染されたお子さんのための病床を確保する一方で、従来より当センターが担ってきた高度医療の患者さんにもできるだけ速やかに入院していただけるように入院調整を担当させていただいています。

今後とも、地域の医療機関の皆さまの安心と、入院いただいている患者さんの安全のために懸命に努めてまいりたいと考えていますので、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



副院長
臼井 規朗

新診療科部長の紹介 新任のご挨拶

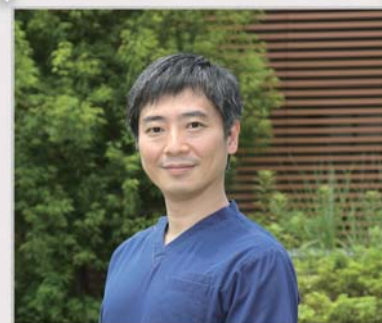
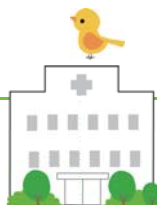


血液・腫瘍科 部長
澤田 明久

小児がん診療の基幹病院として、子どもの白血病、悪性腫瘍を治療しています。血球減少症や免疫疾患にも対応しています。また小児造血細胞移植の基幹病院として、全国から移植を依頼いただいております。

治療は進化しています。最善、最良の治療を提供しつつ、安心して治療を受けられる場の整備にも努めています。治療中も遊び、学ぶことに根ざす子どもらしい生活が維持され、その後はそれぞれの日常へ復帰できるようサポートしています。

どうぞよろしくお願いいたします。



脳神経外科 部長
千葉 泰良

この度、脳神経外科部長に就任いたしました千葉泰良です。初代部長は森本一良（1991年開設当初から2005年）、二代目部長は竹本理（2005年から2022年）が勤め、私が三代目となります。

当センターには2002年に10ヶ月、2011年に1年間、今回は2015年より現在まで合計9年以上在籍して、多くのことを学びました。森本先生、竹本先生が残してくれた信用、実績に傷をつけないよう、さらに地域の医療関係者、患者さんのお役に立てるよう、努力する所存です。

大阪母子医療センターでは大阪府入院フォローアップセンターと連携して、当センターかかりつけの小児にかぎらず大阪府下全域において他施設からも入院の受け入れを行っております。第1波から小児の重症例は必ず受け入れる方針で重症病床を4床確保し、第5波からはさらに病棟を1つコロナ専用として、軽症/中等症も最大25例まで受け入れる体制を整え対応を続けています。第1波から2022年2月末までに約120例の小児の入院がありました。

最近の第6波では1月に24例、2月に51例の入院があり、基礎疾患のある、なしの割合はおおむね1:1という状況です。基礎疾患のある子どもでは重症化が懸念されていますが、第6波の基礎疾患ありの入院37例では軽症が25例(68%)、中等症が8例(22%)、重症は4例(10%)でした。重症の内訳はもともと在宅人工呼吸器を使用している症例が3例、1例は気管切開で肺炎より無気肺が主体の症例でした。死亡例はありません。総じて基礎疾患のある子どもたちも普段の感染症と大きく変わらない治療で元気に退院されています。

コロナ禍において大阪の子ども、保護者の方々が安心して日常生活を送れるようスタッフ一同がんばっております。地域の先生方と顔を合わせた交流の機会が減り残念に思いますが、今後とも大阪母子医療センターをどうぞよろしくお願いいたします。
(呼吸器・アレルギー科 主任部長 錦戸知喜)

News

病気がわからない赤ちゃんに対する **ゲノム解析の有用性を確認** - 全国で診断に難渋した85名の約半数で原因が判明 -

日本の新生児医療は世界最高水準であることが知られていますが、それでも新生児集中治療室に入院する重症の赤ちゃんの1割程度で、病気がわからないことが課題となっています。

従来の検査法では原因を決めることができなかった85名の重症の赤ちゃんに対して、ゲノム解析という新しい方法で原因の究明を試みました。その結果、約半数(41名)が生まれつきの遺伝性疾患にかかっていることが判明しました。結果の判明したうちの約半数(20名)では、検査や治療方針の変更が行われ、このゲノム解析が新しい時代の医療技術として極めて有用であることを示しました。



この研究は、新生児科医と遺伝学研究者からなる全国チーム(8都府県にある17の高度周産期医療センターからなるネットワーク)にて行われ、当センターより野崎昌俊(新生児科副部長)、岡本伸彦(研究所長・遺伝診療科主任部長)が研究に参加しています。



◀詳細は
こちらより

本研究成果は、小児科学分野を代表する国際誌である『The Journal of Pediatrics』に掲載されます。

入院食「モコモコ応援食」で治療を頑張っている子どもたちを応援します！！



モコモコ応援食



化学療法によって食欲が低下している患者さんのために、2022年1月から、子どもたちのお好みメニューを自由に選択できる「モコモコ応援食」を始めました。

人気メニュー上位は、「ピザ&ポテト」、「カレーライス」、「ハンバーグ定食」です。他にも、オムライス、ラーメン、から揚げ定食、牛丼、チャーハンなど、全部で20種類のメニューを用意して、メニュー選びも楽しんでいただいております。

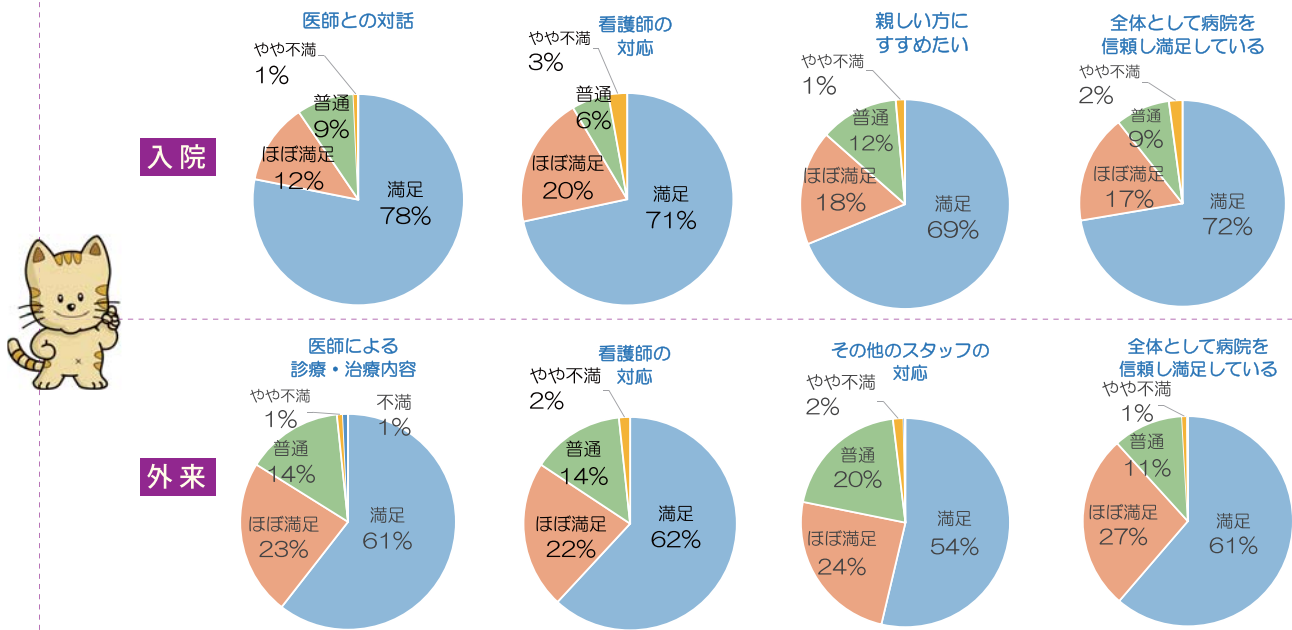
美味しく食べることは、元気の源ですね。

これからも、患者さんを笑顔にできる食事で治療を応援していきます。
★毎週金曜日の昼食に実施しています。

患者満足度調査報告

大阪母子医療センターでは、毎年「患者満足度調査」を実施しております。今年度の結果の一部をご報告します。

入院、外来ともに多くの患者さんには満足していただいているという結果でした。ただし、医師看護師以外の職種の対応については、他の職種に比べ満足度が低いことから、待遇研修等の充実を検討し、より満足度の高い病院を目指していきたいと考えています。



ご意見箱から改善した事例紹介

患者さんから昨年いただきましたご提案のうち「検討中」とお答えしたご意見につきまして、以下のとおり改善いたしましたのでご報告します。

ご意見・ご要望

予約変更の電話が
なかなかつながりません。
一日何回かけても、
つながりません。



回答

予約変更の内容により時間帯を分けて、9:00～10:00は「当日予約変更のみ」10:00～17:00は「翌日以降の予約変更」としました。また、リハビリと歯科関連の予約変更および事務局などの多くの部署に直通電話を設置し、代表電話に電話が集中しないよう対策を行いました。

予約変更	問合せ先	受付時間	電話
① リハビリテーション		8:45-9:00	0725-56-1111
		12:30-13:00	
		17:00-17:30	
② 言語、矯正歯科 等		12:00-13:00	0725-56-1222
		16:30-17:00	
③ その他	当日予約変更	9:00-10:00	0725-56-8775
	翌日以降予約変更	10:00-17:00	

交通のご案内



診察時間：平日 9時～17時30分
予約受付時間：平日 9時～19時

地方独立行政法人大阪府立病院機構

大阪母子医療センター 患者支援センター

〒594-1101 大阪府和泉市室堂町 840

【初診専用】 TEL：0725-56-9890（直通）

FAX：0725-56-5605

【その他】 TEL：0725-55-3113（直通）

FAX：0725-56-7785

【医師相談窓口】 E-mail：chiren@wch.opho.jp

医療者対象
ホットライン
(※24時間受付直通)

PICUホットライン
☎ 0725-56-1070

小児がん・白血病
ホットライン
☎ 0725-57-7677

心疾患ホットライン
☎ 0725-56-3833

この広報誌に関するご意見・ご要望は FAXにて患者支援センターにお寄せください。